昭和39年11月16日（月）　（毎月二回1日、16日）　みいけ　昭和27年9月25日 第三種郵便物認可　第766号　（一）

みいけ

発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話3033番 3100番
編集兼発行人 藤田紀生

労働者は命まで売っていない!!

団結・抵抗・統一で斗い抜こう

三川大変災一周忌追悼大集会

一一月九日、大牟田市立体育館で三川大変災の一周忌を迎えて遺家族の生活安定と労働者絶滅を叫ぶ三井独占と政府に対する抗議の「一周忌追悼大集会」を開催した。総評・炭労・炭婦協・社会党・共産党・社会主義協会からの来賓と組合員・主婦会員の参列者八、〇〇〇名で会場はぎっしりうまり、水俣労組からかけつけた楽団の仲間の吹奏によって全員合唱「戻ほる仲間」で幕をあけた一周忌はじめやかな中にも、合理化の犠牲となった仲間の前に、再びこの災害を起こさない斗い を誓った。

迦佗、各代表の弔いのことば、嬉者ののち、抗議集会につづき、実行委員から宮川組合長の挨拶のの ち、炭労部口副委員長、全国炭婦協田島会長、遺族代表丸山景さんからそれぞれ、三井鉱山の合理化のために起きたこの大災害の責任を会社にあくまで追及するとともに、反合理化の斗いを進める決意がのべられた。「がんばろう」の全員合唱で集会を終った。遺族のある三才代の若い奥さんは、夫から三井鉱の根性を学び斗い抜こうと決意表明がなされ、長かった三川鉱の一周忌はこうして幕をとじた。

一周忌はじめやかな中にも、集会に出席しさいとわれてもおなか出席しませんでしたが、今日この集会に出席して、みなさんの暖かい支えをしみじみ感じ、ほんとうに三池労組に残っていてよかったと思った。そして真び私のように悲しい家工人や遺族をつくってはならないとみなさんに誓えたいと思います」と語ってくれた。

一一月九日　市立体育館で行なわれた怒りと悲しみの三川大変災一周忌追悼大集会

詩　石蕗の花が咲きました

宮浦・高橋竜生

ことしも
石蕗の花がかなしみを
いっぱいこめて咲きました

あれから　一年　いま
あなたたちがもたえ
くるしみながら冬っ子黒く
たたれていった
死体のそばはうすのよう
雪のように真白い岩粉が積り
爆風で吹き飛んだ坑道いっぱい
しろじろしさが本気味に舌を
ひらめかし　うす笑っている
どんなに厚く
岩粉を撒きちらそうと
四五人のなかまの命と
生々しい爆発の
黒いつめあとは消えない
とうちゃんは返せ!
仲間は返せ!
今も目をとじると
焔を吹く地底から
なかまたちの血の叫びが
つき上げてくる
そして
遠く幽かな闇の中から
なかまたちの
荒いい息づかいがする
あなたの腰で
ただ二つ生きていた時計の音が
カチカチ今も高
かぎりなく怒りと悲しみをこめ

焼香する遺族

秋霜ようやく色を深めてきた今日十二月九日、私たちはやっと一年前に焦燥と悲しみに身のおきどころもなく夜を徹した日を迎えました。

あの日の三川坑の爆発は、長いそして輝かしい三池労組の歴史に拭うことのできない労働者の怒りの一頁を加えた日でした。

大牟田から澄みきった空を奪い紺や鉄がすんだ清流を五色の汚水にぬり変えた三井資本の繁栄は、七〇年にわたる人と自然の搾取であきたらず、さらに史上類を見ない規模で人命を奪い去ろうという非道な事実の上に築かれたものであることをこの時ほど思い知らされたことはありませんでした。私たちはこの大変災が明らかに三井財閥ようやく色を深めてきた今一年の驚異的な資本主義に根ざした人命軽視の人災であることを知っています。

なぜあの爆発が起ったのか、あの惨事をそのままに資本の正体を余すところなく説明しいることをそれは抗議でもだえながら息耐えた皆さんが一番よく知っておられるはずです。

その公表されない原因を、全国の仲間たち仲間たちに知ってもらうことが、残された私たちの任務だと思います。

また三池労組の主張に耳をかそうともしなかったマス・コミの一方的報導に苦しめられ、ゆがめられた三池労働者の斗いの真相を正しく国民に伝えるそのあやしたために三池の兄弟たちは、差別に耐えて斗っていると信じます。その

ことをが「生命までは売っていない」という労働者にとって最高の使命を守ろうとした皆さんへの弔辞だと思うからです。

皆さんの遺志は、いま総評を中心とした全国の労働者に受けつがれ「安全なく労働は」のスローガンのもと、猛烈な斗いが拡がっています。そしてそれにもまして、皆さんの遺族の方々が立派に皆さんの志を継いでおられることを、報告しなければなりません。

不当な差別を試みようとした夏の一時金をはじめ、たくさんの懸案事項を遺族の方々を主力として解決できたことも、その一つに数えることができます。

在天の霊よ、どうか安らかに眠って下さい。

皆さんの生前の斗いは必らず私たちが守り抜きます。

一九六四年十一月九日

日本労働組合総評議会
議長　太田　薫
（代読・岩井事務局長）

生前の斗いは守り抜きます

総評　岩井局長の弔辞

<作　文>

三川鉱の大爆発で夫を奪われて

中西文子

あの三川鉱の炭じん爆発で無残に殺された主人の一周忌がやってくる。忘れようとしても忘れ得ない、この間のあのおぞましい地獄図のような無残な光景が、はっきりとよみがえってくる。

あれからの一年は「あっ」という間に過ぎたようでもあり、またひどく辛く悲しく苦しい長い長い一年でもあった。

一カ月、二カ月と日がたつにつれて、悲しみはますますはげしくなってくる。忘れようとしても忘れ得ない。

主人はあのころ、しきりに「坑内の保安が悪い、危ないかたがない」といっていた。そして「退転したい」と何度も私にいっていたが、やめてからさきの仕事のあてもなかったし、子どもたちもちょうどこれからお金がかかる時期なので思いきってやめるわけにもいかなかった。しまいには主人もあきらめて一定年まで坑内にさがろうと思わん。せいぜい五十くらいまでさがったら子どもたちもすこしは大きくなるから、そのときもめてなかみはじめよう。かあちゃんなにかよかろう…」と、ふたりでよく話しあったこともあった。

そんなこともみんな、いまとなってはなつかしいことになってしまった。だが、どうしても許せないのは三井鉱山の態度である。

「保安は会社におまかせください」の言葉を信じて、だまって仕けばいいんです」といった調子で、組合からの再三にわたる保安要求の申しれにも頭として耳をかそうとはしなかった。その結果の、あの惨じうしかいないような悲惨な事故となったのである。

会社にとっては、かけがえのない人の命よりも一かけらの石炭のほうが大切だったのである。そしてあの大事故の責任を感じているとは考えられないのである。

この一年間の会社の態度は、ことごとく誠意のないものであった。

私は主人の遺体をはじめて見たとき、なんとも形容しがたい悲しみにうちのめされながらも、三池争議こいままでの三年間、ありとあらゆる差別待遇に歯をくいしばってたえたから「おれは死んでもこれからは会社にはなりたくない。おれは三池労組員だということを誇りに思っている。いつかまた、きっとくいときもあるだろう」と口ぐせのようにいっていた主人が、とうとうそれを待たずに会社に殺されてしまったのかと思うと主人が可哀そうでならず「さぞくやしかっただろう」「さぞ無念だったことだろう」と、はげしい怒りで体がふるえた。

人間の死とは、こんなにもろくはかないものだろうか。なんの前ぶれも、すこしの予感もなく、ふだんどおりでしかわらず昼まではいつもの朝除などして、あすの仕事の"段取り"まで気をくばり元気にオートバイで出勤した夫……。その夫が翌日は病棟に入って帰ってこようとは、どんなに考えても納得いかない。

最後に出勤するときの主人のオートバイに乗った姿だけが、強烈に私の脳裡にやきついてはなれない……。

火葬場で夫を火の中におくるとき、私は夫に誓った。

「とおちゃん、この仇はきっとやる。三井鉱山を自分が生きているかぎり呪ってやる。子どもたちにも"とおちゃんは死んだんじゃない。会社に殺されたんだから絶対に忘れるな"といいきかせた。とおちゃん、子どもたちの仇を必ず討ってやるから、どうか安らかにお眠りください。そして子どもたちが、けっしてとおちゃんのように資本家から殺されることのないようにしっかり私たちを見守っていてください。私はとおちゃんが早死にした分だけを長生きして、子どもたちを守っていきたいと思います。ほんとにとおちゃん、あとのことは心配いりませんから、どうぞ安らかにお眠りください。永遠にさようなら……」。

炭労は前進する

―第42回臨時大会のあらまし―

（はじめに）

この二・三年の炭鉱労働者の生活たたかいは、一くちでいうと「後退」の二字につきます。去る二月二六日開催された第四一回臨時大会は、この後退をこうはね返し「前進」にうつるかという歴史的な討論で終始し、ついに「炭労は前進する」という展望と決意を確立することができたと思います。

もちろん、このことの証明は、今後のたたかいのなかで決定されるわけですが、ここにとりあえず主要な問題点だけをあげることにします。

たたかいの基調は抵抗斗争

二日間におよんだ小委員会の討論は「運動方針の基調」に集中され、原案は大幅に補強されたが、重要な大綱は

(1)**たたかいの基調**は、政府・独占資本の現在の反社会的・反国民的な炭鉱合理化政策との対決におく。

(2)目、炭鉱労働運動がとるべき態度は〝抵抗〟の二字につきる。この抵抗斗争をとおしてのみ現在の反社会的・反国民的合理化政策にブレーキをかけうるであり、第二組合幹部の主張する「抵抗しない団結」という迷論はどこ〜けいなものはないのである。

労働者の団結は、憲法で保障されている抵抗権の具体化であり、絶対にのがすことのできない原則的権利だということを「三池の現実」に学び、われわれは再認識している。

さらに、全国の仲間たちからのあたたかい物心両面のすくいが、独占の政治的支配と圧迫に反対し、平和と民主主義を守るという階級的同志愛に根ざしいわば被支配者の統一的団結のあらわれであることも確認し、団結と抵抗を強化しつつ、労働者らしい広い視野の統一をかちとろう!!

これが「周忌」に際しての三池労働者と家族たちの決意と展望である。

団結を強めるたたかい

職場で、みんなが助け合い、同志的な話し合いを熱心にかさねている。

家のまどもが寄れなくなったものを交換したり、内職を世話しあったり、喜びと悲しみを共にするなかから、外来を含めて政治的自覚も高める**地域学習会**がさかんになってきた。

同時に、われわれの団結は、遺族のみなさんやガス中毒の仲間たちを固いスクラムで包む団結であり、去る九月の大変災一周忌大集会は、この決意をはっきり示していた。

また、われわれの団結は、命を守り、生活を守る「抵抗闘争」を前提とする。

古今東西を問わず「労働者団結」とは、もともと政府と資本の不当な配に反対してたたかうための組織づくりだった。

(3)**たたかいの指標は**

①生命を守るたたかい。

②賃金・期末手当・福利厚生など労働条件の維持向上のたたかい。

③労働者の権利擁護・既得権導入・労働強化反対のたたかい。

④社会保障のたたかい。

これらの指標は、すべて資本家的合理化強行に反対する基本的課題であり、**体制的反合理化斗争**としてとりひとつ切り離すことのできないものである。

したがってたたかいを強めながら職場を基礎に**「改憲阻止の運動」**を高めてゆくことが要請されている。

われわれは、油内閣の五、五〇〇万トンの公約はあくまで実現するよう迫るが、これは生産の量性を労働者が負うことを意味するものではない。

われわれは**「国有化」**を提起するべき条件が成熟しつつあることを指摘できる。しかし支配階級と石炭資本が「利潤生産」を断念し無抵抗で国有化・社会化に踏み切るだろうとみなすのは、空論に近い。要は力関係であることを銘記すべきである。

命を守るたたかい

運動方針の原案でも、たたかいの目標の第一項は「生命を守るたたかい」であったが、討論の末、保安斗争のピッチを高め、反合理化斗争とのつながりを強めることを決定した。

(1)基準法をこえる残業はやらない

(2)休日出炭はやらない。

(3)重筋労働・災害を発症種は、残業を漸次へらす。

(4)時間短縮は、専門委員会を以て検討し、当面「勤労感謝の日」を有給休暇とした。

(5)労働条件切りすげ・転職を配の強化・団結破りの攻撃に対しては炭労の全力をあげて抵抗したたかう。

賃金・期末のたたかい

期末手当は五円獲得のため、奉仕につながる強力斗争と、三池労組の**「組織別配分」**を炭労として要求する。

賃金(月額六、〇〇〇円)とし、細目は一月大会までの大衆討議により決定し従来以上のたたかいとする。

なお、「第二次調査団」の答申については、「ストライキ」と山元代表者の上京抗議でたたかうことを決定した。

(註) 熱烈にしかも冷静な山の苦悩も出された小委員会をふくめて五日間の大会は**「前進」「反撃開始」**を全員が決意するという収穫をえた。五人組などの評価やゆ衆斗争の組織論についても、従来にない論議が集中されたことを附言しておきます。

主張

だんけつと抵抗

命を守るたたかい

いまを本部では「**負傷ゼロ運動**」が災害絶滅をめざしてすすめられているが、これは今年すでにこの犠牲を出し、しかも保安団をまたまた会社が拒否している三池の現状では、第一義的なたたかいである。

そのため、発破前後のガス検定や規定違反などが守られているかどうかを、分会ごとに担当し合って、何カ月も「メモ化」をつみ上げ、具体的に会社を突きとげるという、するどい迫力をもったたかいが組織されねばならない。

「みんなが保安監督官だ」という自衛闘争は、会社側の「保安サボ」を決して見逃さがしはしない。

生活を守るたたかい

抜き打ちで消費者米価を一四・八%も値上げした反動内閣は「公約」をふたしてして、公共料金の一せい値げを強行することは必至で、**期末手当五万円の獲得・一括交渉**と組織別賃上げによる配分は、炭労大会で決定された当面の生活防衛闘争であり、米麦の大幅値上げにつながるたたかいである。

能率が上がり、会社の決算が「黒字」だというのに、三池炭鉱会社業者の低賃金・労働強化は耐えがたいばかりだという現在、第二組合幹部は期末手当要求額四万円をようやく決めた。

われわれは、命を守る「**保安共闘**」さえ二回にわたり拒否している。

団結を強めるたたかい

職場で、みんなが助け合い、同志的な話し合いを熱心にかさねている。

家のまどもが寄れなくなったものを交換したり、内職を世話しあったり、喜びと悲しみを共にするなかから、外来を含めて政治的自覚も高める**地域学習会**がさかんになってきた。

同時に、われわれの団結は、遺族のみなさんやガス中毒の仲間たちを固いスクラムで包む団結であり、去る九月の大変災一周忌大集会は、この決意をはっきり示していた。

また、われわれの団結は、命を守り、生活を守る「抵抗闘争」を前提とする。

古今東西を問わず「労働者団結」とは、もともと政府と資本の不当な配に反対してたたかうための組織づくりだった。

命を守るたたかい

運動方針の原案でも、たたかいの目標の第一項は「生命を守るたたかい」であったが、討論の末、保安斗争のピッチを高め、反合理化斗争とのつながりを強めることを決定した。

(1)基準法をこえる残業はやらない

(2)休日出炭はやらない。

(3)重筋労働・災害を発症種は、残業を漸次へらす。

(4)時間短縮は、専門委員会を以て検討し、当面「勤労感謝の日」を有給休暇とした。

(5)労働条件切りすげ・転職を配の強化・団結破りの攻撃に対しては炭労の全力をあげて抵抗したたかう。

賃金・期末のたたかい

期末手当は五円獲得のため、奉仕につながる強力斗争と、三池労組の**「組織別配分」**を炭労として要求する。

賃金(月額六、〇〇〇円)とし、細目は一月大会までの大衆討議により決定し従来以上のたたかいとする。

なお、「第二次調査団」の答申については、「ストライキ」と山元代表者の上京抗議でたたかうことを決定した。

(註) 熱烈にしかも冷静な山の苦悩も出された小委員会をふくめて五日間の大会は**「前進」「反撃開始」**を全員が決意するという収穫をえた。五人組などの評価やゆ衆斗争の組織論についても、従来にない論議が集中されたことを附言しておきます。

ソ連邦社会主義革命の第四七周年記念日に対するメッセージ

プラウダ新聞を通じてソ連邦の国民のみなさんへ

私たち三池炭鉱労働者とその家族は、ソ連邦の国民のみなさんが地球上で初めて歴史的な社会主義革命を達成し、あの困難に満ちた第二次世界大戦をたたかい抜きその後の四〇年にもおよぶ独立国家に力強い直接の支援を与えた偉大な事業に対し、プラウダ集団の方々に心からご挨拶申しあげます。

第四七回の革命記念日、ほんとうにおめでとうございます。

ひとくちにはいえない困難を一つひとつ克服してこられ、さらに全世界の被圧迫民族と労働者階級の実質的な解放のため、一層の前進を期しておられるみなさんに心から敬意を表したいと思います。

この機会に私たちは、五年前の「安保と三池」のたたかいから昨年一二月九日の三池炭鉱大爆発によって大爆発犠牲者である二〇名のガス中毒患者に対する療養招待についてあらためて心から感謝申しあげます。

〈承知のとおり「炭じん爆発」で全工一瞬のうちに四五人名もの仲間が殺されたのですが、私たちはこの大災害が「労働者がどれほど死んでもかまわない」という資本主義的合理化強行の結果であると確認し、労働者解放に直結する反合理化斗争を今後いよいよ徹底する決意であることを表明し、ご挨拶といたします。

一九六四年一二月九日

三池炭鉱労働組合
組合長　宮川　睦男

トルード新聞を通じて全ソ連邦労組評議会へ

一二月七日、第四七回の革命記念日に際しての三池労働者と家族たちの決意と展望である。

一九六四年一二月九日

三池炭鉱労働組合
組合長　宮川　睦男

東京事務局長ヴェ・オフチンニコフ氏を通じて送ったもの。なお炭鉱労働者三池代表による労連大使館訪問を行なった。

※右は先日来山されたプラウダ新聞の記者が、三池炭鉱労働組合の代表に対して、ソ連邦社会主義革命の第四七周年記念日に対するメッセージを送ったものである。

組合日誌

（11月）

2〜6日　炭労大会

3日　宮浦坑内二番方1時間50分時限スト（再開55回）

5日　四山・三川二番方1時間50分時限スト。四山・宮浦・三川三番方方別スト

9日　三川大変災一周忌追悼大集会

11日　宮浦坑内一・二番方1時間50分時限スト。三番方方別スト

14日　三川坑内常一番・二番方、坑外全員1時間50分時限スト。三番方方別スト。宮浦坑外全員、二番方1時間50分時限スト四山坑外全員、二番方1時間50分時限スト。三番方方別スト